

## 六国史に於ける「請」の用法

李 玉婷

はじめに

六国史とは、古代日本の律令国家が編纂した六つ（『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』と『日本三代実録』）の一連の正史のことである。一部に紀伝体的要素をとりいれつつも、おおむね編年体で記されている。

古くから六国史に関して幅広く研究されて来ているが、本稿と重複する処が見つからなかった。論文『六国史に見える「請益」の用語について』（泉 敬史 札幌大学総合論叢 第23号 2007年3月）の題目は本稿と類似するが、内容は「請益」の意味と用法、「請益者」の身分についての検討であり、以下の内容と全く異なる。

### 一、『将門記』と六国史における「返請」と「請返」

『将門記』は、従来の日本語史研究において、変体漢文であると位置づけされてきた<sup>(1)</sup>。日本の漢文であることは、記事内容

が当に日本を舞台にしたものであるので、その評価は確かなことである。しかし、稿者は、正格漢文（中国語文）とは異なって、変体漢文と言われ、日本語的言語事象が色濃く反映しているとする根拠が、実証的に整理されて論じられては来なかったように感じているが、この問題は別稿に譲ることとして、変体漢文の一つとして位置づけ、本稿に検討を加える。

本稿に論じようとする『将門記』の「返請」の例である。

#### 1、所被虜掠之私物可返請之由 (251)

この例にある「返請」の語順は中国語の語順「請返」と相違することに注目したい。実際には、汎時代的な検索でしかないが、台湾中央研究院漢籍電子文献資料庫<sup>(2)</sup>に対して検索を掛けてみると、『北史<sup>(3)</sup>』には「請返」という表現が一例、『新唐書<sup>(4)</sup>』には一例、『徑山志<sup>(5)</sup>』には一例、全三例見られた。ともに、「返請」は確認されない。古漢語に於いても現代語に於いても、「請」は多く使われる。一般的に「請返」の場合に「請」は「返」を修飾し、「…を返して欲しいと請う」の意であり、請うのが下接の

内容である。一方、「返請」の場合に「返」は「請」を修飾し、「返して…を請う」の意で、「返」が「請」の下接の内容を請う時の様子或は状態である。『将門記』の用例では「虜掠された私物を返して欲しいと請う理由」の意であり、「請返」の用法に合致する。

正格漢文と称される歴史書の六国史に於ける「返請」と「請返」の使用について調査してみた。

「請返」に関する例を調べたところ、『続日本後紀』に「請返」は2例

- ①、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣、請返上職田職分資人雑色考人衛士、以避尸素之譏、助國用之費、不許、
- ②、右大臣從二位橘朝臣氏公上表、請返食封一千戸、天皇賜勅書聽之、

『日本三代実録』に「請返」と続く例は4例

- ③、若不請返抄、責其解由、令填欠負、
- ④、望請返附本貫以継家業、昭許之
- ⑤、若不觸寺司、請返之類、勿齒僧中、
- ⑥、菅家文章第九、大納言源朝臣、多請返封二百戸表参照

「返請」は1例

- ⑦、雖捉其馬送於寮家、各有所託、隨即返請、
- ある。

例③を除き、例①、例②、例④、例⑤と例⑥にある「請返」は「(…を)返して欲しいと請う」の意で、請うのが下接の内容であり、用法も語順も中国語文と一致する。其の中に例④に於いては「請」の上に動詞「望」があり、下に動詞「返」がある。この例は「望むことは本籍に付き返して欲しいと請う」の意であり、請うのは「請」の下接の内容「本籍に付き返す」こと、上接の「望」は請求についての思いだと考えられる。

例③にある「請返」は「請」と「返抄」の二つの単語で、「返抄を請う」の意である。語順は中国語文と一致するが、「(…を)返して欲しいと請う」の意ではない。

例⑦にある「返請」は真福寺本『将門記』の例と同じ表記である上に、同じく「(…を)返して欲しいと請う」の意である。例①、例②、例④、例⑤、例⑥の「請返」と「返請」との語順は異なるが、意味は同じであって、語順の違いが意味の違いを表してはいない。

中国語文では「請返」と記れるが、和化漢文の真福寺本『将門記』では、語順は「返請」と表記され、また、正格漢文と称される『日本三代実録』では中国語文の語順と等しい「請返」と中国語文の語順と一致しない「返請」とが共存するが意味は同じである。正格漢文と位置づけされる正史の資料に於いて、一つの意味を表す場合に二種類の表記が共存しているのは何故であろうか。

この問題点について、六国史における「請」の用法を検討することによって、六国史の日本漢文としての位置を明らかにしたい。

## 二、六国史に於ける「請」の用法

前節に言及した「返請」と「請返」の語順の問題に関して、六国史に於いて「請」は名詞と動詞の用法しか存しない。その内、「請」の動詞用法の接続は名詞より複雑である。此処では文章の語順を基準にして更に分類した。つまり、「請」の前に「請」を修飾する副詞等がある場合は「修飾語＋請」に分類し、ない場合は下接の品詞の性質によって、動詞なら「請＋動詞」に分類して、名詞・短句と単独使用なら「請（＋ほか）」に分類した。例えば、「伏請救於日本府行軍元帥等」（日本書紀）の場合は、「請」の下に動詞「救」が下接するけれども、文章の語順を基準にして「伏」が「請」の上にあるため、「修飾語＋請」に分類した。但し、本稿は主に「請」の動詞用法の接続に関する研究である故に、前述の状況にも動詞を下接する用例を統計して括弧に記述した。

本稿では動詞用法の「請」の接続を巡って検討したため、名詞の用法と動詞の「請（＋ほか）」を別にして、動詞用法の「請＋動詞」と「修飾語＋請」を詳しく検討することとする。

総計	動詞			名詞	
	修飾語＋請 (請＋動詞)	請＋動詞	請（＋ほか）		
184	40 (17)	56	73	15	日本書紀
233	85 (33)	55	60	33	続日本紀
158	70 (28)	22	34	32	日本後紀
178	61 (24)	33	49	35	続日本後紀
78	26 (9)	17	31	4	日本文徳天皇実録
630	278 (98)	125	107	120	日本三代実録

○『日本書紀』

『日本書紀』は奈良時代養老四年（七二〇）に完成した。神代から持統天皇の時代までを扱う。漢文・編年体をとる史書である。

（以下単語の下に付いている数字は用例数）

①、「請」＋動詞の用例（56例）

請許 1 請移 2 請斬 1 請悛 1 請差 1 請付 2 請問 1  
 請戒 1 請納 1 請決 1 請媚 1 請救 2 請奉 1 請儲 1  
 請集 1 請剔 1 請垂 1 請上 1 請代 1 請願 1 請施 1  
 請曰 3 請哀 1 請入 1 請饗 1 請服 3 請増 1 請謁 1  
 請免 1 請赦 1 請討 1 請試 2 請立 4 請罷 5 請聞 1  
 請還 1 請奏 1 請聽 1 請贖 1 請為 1 請就 1

右の56例を分析すると、全部の用例は動詞「請」＋具体的意味のある動詞の形である。解釈すると「…して欲しいと請う」つまり、「ある行為を請求する」として使われたことが判った。「請」に下接する動詞は全部具体的な意味があつて、ある行動に関して請うという意味で例外がない。

②、修飾語＋「請」の用例（40例）

多請 1 遙請 1 奏請 11 悉請 1 固請 3 伏請 3 祈請 3  
 願請 1 頻請 1 欲請 2 謹請 1 求請 2 屈請 3 実請 1  
 尊請 2 応請 1 始請 2 令請 1

右の40例を分析すると、各用例には動詞、副詞が「請」の前にあり、「請う」様子や状態を表して「請」を修飾する。例えば、「多請」・「奏請」を解釈すると「多くに…を請う」・「上奏して…を請う」の意として使用されている。請求の状況や天皇に対しての敬意を表現する意味で出現する。①の「…して欲しいと請う」の用法とは異なつて、「どの様な様子や状態でその行為を請求する」のかを表示する。

○『続日本紀』

『続日本紀』は、平安時代初期に編纂された勅撰史書。『日本書紀』に続く六国史の第二にあたる。菅野真道らによつて延暦十六年（797年）に完成した。奈良時代の史料で、編年体、漢文表記である。

③、「請」＋動詞の用例（55例）

請還 1 請改 2 請賜 2 請復 1 請託 3 請従 3 請置 2  
 請代 1 請奉 2 請限 1 請停 1 請令 1 請就 1 請裁 2  
 請仰 2 請授 1 請建 1 請取 2 請聞 1 請集 1 請欲 2  
 請屈 1 請得 1 請求 1 請受 2 請修 3 請鎮 1 請進 1  
 請編 1 請預 1 請入 1 請遷 1 請除 1 請行 1 請加 1  
 請抛 1 請依 1 請遣 1 請征 1 請檢 1

右の55例を分析すると、『日本書紀』の①の用例と同じように、全ての用例は動詞「請」＋具体的意味のある動詞の形である。

日本語に訳すと、「…して欲しいと請う」、つまり、下接の動詞の表す行為を請求するという用法であると分析される。

④、修飾語＋「請」の用例（85例）

応請 1 囑請 3 望請 49 屈請 5 奏請 6 来請 1 苦請 2  
祈請 3 勸請 1 延請 1 固請 1 託請 1 諮請 1 訴請 1  
禱請 1 奉請 1 伏請 2 蒙請 1 申請 1 更請 1 献請 1  
私請 1

右の85例を分析してみると、各用例は動詞、副詞が「請」に前置される。動詞が上接する時、訳せば「…して…を（…して）請う」になる。原文に一番多く使われた「望請」を例にすると、「望むことは…を（「下接の動詞」して欲しいと）請う」と解釈すべきだと思われる。此処の「望」は後述した内容・行為を請求する時、請求者の懇切な気持ちと上位者に対しての敬意を表すことができる。副詞が上接する時、訳せば「…に請う」になる。例えば、「苦請」は「苦しくして…を（「下接の動詞」して欲しいと）請う」と解釈される。『日本書紀』の②と同じである。

○『日本後紀』

『日本後紀』は、平安時代初期に編纂された編年体の勅撰史書で、藤原緒嗣らの撰による。

⑤、「請」＋動詞の用例（22例）

請曰 1 請誅 1 請更 1 請裁 2 請許 1 請問 2 請入 1

請擇 1 請頌 1 請准 1 請減 2 請給 1 請停 1 請除 1  
請遷 1 請令 1 請奉 1 請致 1 請發 1

右の22例を分析すると、①、③と同じく全ての用例は動詞「請」＋具体的動作などの意味のある動詞の形である。訳すと「…して欲しいと請う」、つまり、「ある行為を請求する」の意として使われていることが判った。

⑥、修飾語＋「請」の用例（70例）

奏請 6 申請 1 矜請 1 伏請 33 始請 1 上請 1 重請 1  
覆請 1 宜請 2 望請 2 固請 2 表請 1 預請 1 停請 1  
冒請 1 延請 1 起請 4 来請 1 議請 1 輒請 2 誠請 1  
陳請 1 告請 1 苦請 1 屈請 1 賚請 1

右の70例を分析すると、各用例は動詞、副詞と名詞が「請」の前にあり、「…して…を（…して欲しいと）請う」・「…に…を（…して欲しいと）請う」の意である。請う時の様子・状態・気持ちを表し、また、上位者（天皇）に対しての敬意も含み、②、④と同様の「如何なる様子・状態でその行為を請求するのか」の用法だと判断される。

○『続日本後紀』

『続日本後紀』は、日本の平安時代に成立された編年体の歴史書で、摂関政治へ移行する時代の史書である。

⑦、「請」＋動詞の用例（33例）

請停 4 請易 1 請廻 1 請辭 4 請減 4 請為 1 請除 2  
 請令 2 請返 2 請垂 1 請解 3 請用 1 請替 2 請託 1  
 請奉 1 請補 1 請退 1 請准 1

右の33例は①、③、⑤と同じく全部の用例が動詞「請」＋具体的動作などの意味のある動詞の形である。訳すと「…して欲しいと請う」の意になる。つまり、「ある行為を請求する」意に使用されたことが判明した。その内、「請返」は二例あり、「…を返して欲しいと請う」の意である。

⑧、修飾語＋「請」の用例（61例）

陳請 3 開請 1 望請 39 起請 2 並請 1 伏請 2 未請 1  
 祈請 3 屈請 1 宜請 1 奉請 2 確請 1 奏請 1 上請 1  
 重請 1 固請 1

右の61例を分析して見ると、各用例は動詞、副詞と名詞が「請」の前にあって、「…して…を（…して欲しいと）請う」・「…に…を（…して欲しいと）請う」の意である。「請」の上接語は請求者が請う時の様子・状態或は心境を表示する。また、上位者（天皇）に対しての敬意も含んでいる。②、④、⑥と同じく「如何なる様子・状態でその行為を請求するのか」の用法として使われたことが判明した。

○『日本文徳天皇実録』

『日本文徳天皇実録』は、平安時代の編年体の史書である。

⑨、「請」＋動詞の用例（17例）  
 請稟 1 請擇 1 請准 2 請問 2 請加 4 請止 2 請除 1  
 請發 1 請為 1 請誅 1 請至 1

右の17例は、①、③、⑤、⑦と同様に全部の用例が動詞「請」＋具体的な意味のある動詞の形である。訳せば「…して欲しいと請う」の意味になる。つまり、「ある行為を請求する」の意として使われたことが判った。

⑩、修飾語＋「請」の用例（26例）

勸請 1 屈請 1 苦請 2 奏請 4 敦請 1 別請 1 上請 9  
 望請 2 伏請 2 豫請 1 陳請 1 自請 1

右の26例の全てに動詞、形容動詞と名詞が「請」の前にあり、「…して…を（…して欲しいと）請う」・「…に…を（…して欲しいと）請う」の意である。請う時の様子・状態或は気持ちを表して、同時に上位者（天皇）に対しての敬意も含まれる。②、④、⑥、⑧と同じ「如何なる様子・状態でその行為を請求するのか」の用法だと判断できた。

○『日本三代実録』

『日本三代実録』は、日本の平安時代に編纂された編年体の史書で、藤原時平、菅原道真、大蔵善行、三統理平による。

⑪、「請」＋動詞の用例（125例）

請解 10 請除 3 請賜 6 請為 3 請准 5 請罷 14 請従 2

請集2 請用4 請停7 請刊1 請捨2 請安置2 請復4  
 請奉4 請預2 請留1 請依6 請仮1 請辞1 請省1  
 請頼1 **請返1** 請減7 請改1 請欲2 請入1 請配置1  
 請移1 請開1 請止1 請還2 請試2 請隨1 請致仕3  
 請給2 請収1 請援1 請發4 請降1 請割1 請調1  
 請損1 請支1 請換1 請令1 請授1 請来1 請立1  
 請領1 請出家1

右の125例は**①、③、⑤、⑦、⑨**と同じ様に全部の用例が動詞「請」

十具体的な動作などの意味のある動詞の形であり、「…して欲しいと請う」、つまり、「ある行為を請求する」意として使われている。此の中に「…を返して請う」を表す「請返」一例と記述して掲げたが、部分一?の終わりに述べた三例と矛盾している。二例は「請」の前に「望」と「多」が上接するため、この分類ではなく「修飾語＋「請」」に分類したが、「日本三代実録」には、「請返」が計三例あるということに注目しておきたい。

⑫、修飾語＋「請」の用例(278例)

奏請20 伏請12 苦請3 申請39 屈請7 望請132 **返請1**  
 陳請8 起請19 固請1 虚請1 懇請1 来請3 復請2  
 確請1 延請1 祈請6 重請2 謹請3 自請1 必請1  
 多請1 同請1 先請2 表請5 三請1 不請3 未請1  
 各請1

右の278例に「返請」の一例外には動詞と副詞が「請」の前にあって、「…して…を(…して欲しいと)請う」・「…に…を(…して欲しいと)請う」の意である。請う時の様子・状態或は気持ちを表して、上位者(天皇)に対する敬意も込めている。**②、④、⑥、⑧、⑩**の用例と同じく「如何なる様子・状態でその行為を請求するのか」の用法である。そうであれば、「返請」は語順から「返して…を(…して欲しいと)請う」に訳すべき語順である。

しかし、原本を調べると、此処の「返請」は「捕まれた馬を返して欲しいと請う」の意である。つまり、**⑪**にある「請返」と先に注目を促した二例の「請返」と同じように「…を返して欲しいと請う」の意である。同じ意味、同じ用法であるが、語順が異なる。すなわち、「日本三代実録」においては、「返請」も「請返」も同じ意味を表していることが問題となる。

以上六つの資料を検討した結果、「請」は動詞として連文を作る場合、下接の動詞に全て具体的な意味あり、其の行為に関する請願である。

「返請」の語順の「返」は、どのような様子・状態・思いを表現する位置にあって、下接の行為を請求したのかを表す語順のパターンである。「返請」は孤例であるが、「請返」と同じ意味を表すものとして使われている。『将門記』にある「返請」と共に語順の問題として、日本語的語順の用法であると考えられる余地が

あることが判明した。

### 三、まとめ

六国史における全て用例を検討したところ、『日本三代実録』に一例の「返請」の語順で、中国語文等には表れない用例が確認された。

稿者の拙稿では、中国語文に近いと確認した『日本三代実録』は、本稿で語順に問題があることが判明した。この例は真福寺本『将門記』にある「返請」の例と同じ意味、同じ語順であることより、『日本三代実録』他、六国史が正格漢文と称されて本当に良からうかと考える必要がある。また、楊伯峻著『古漢語虚詞』（中華書局1981年2月第1版 2000年8月北京第3次印刷）に記述される「請」には副詞の用法があると述べられている。しかし、六国史には、「請」は副詞の用例が見つからない。動詞と名詞の用法しか存しておらず、六国史は正格漢文と評価されるものの、中国の古漢文に現れる「請」の用法より狭く、中国古漢文と性格漢文といわれる日本漢文の六国史とは、漢字の用法に距離があるものと認めざるを得ない。

今後は「請返」と「返請」に関するこの論考の視点から、中国側の漢字の用例と日本漢文である六国史がどのような距離があ

るかの検討を重ねていきたい。

### 注

- 1、小林芳規「将門記承德点本の仮名遣をめぐって」（『国文学攷』第 四九号、一九六九年三月）
- 鈴木恵「真福寺本将門記に於ける助字の訓法と詆添の方法」（『鎌倉時代語研究』第二輯、一九八九年七月）
- 倉時代語研究』第二輯、一九八九年七月）
- 小林芳規「和化漢文における口頭語資料の認定」（『鎌倉時代語研究』第二輯、一九八九年七月）
- 2、資料庫の内容は經・史・子・集の四部を含めて、其の中に史部を以て主とし、經・子・集部を以て輔とする。若し類別を以て所属すると、又略して宗教文献・医薬文献・文学與文集・政書・類書與史料彙編等となる。二十餘年を以て歴代の典籍を収録し、九百三十四種、五億二千五百九十六萬字に達して、内容は主に全部の重要な典籍を包括している。
- 3、正史『北史』（唐李延壽撰、楊家駱主編 底本…元大徳本  
用例…雍表暴忠罪、陳己不能匡正、請返私門。（元雍は上表して于忠の罪を暴き出し、自分が匡正する事が出来ないのを陳述し、自分を家に返して欲しいと請う。）列傳第七／獻文六王／高陽王



雍 子泰 泰子斌による。

4、正史『新唐書』（宋）歐陽修・宋祁撰、楊家駱主編 底本…北宋嘉祐十四行本

用例…初東寇也，連歲不解，其大臣請返國，不聽，自殺者八人。

（初めて東に侵略して、連年にやめなかった。其の大臣が（松贊干布に）國に返して欲しいと請いたが、（松贊干布は）聴かなかつた。自殺した者は八人。）列傳第一百四十一上吐蕃上による。

5、地理『徑山志』（明）李燁然刪定、徐文龍・陳懋德訂、宋奎光輯 明天啓四年（1624）原刊本

用例…遵其師遺囑願盡散去立有議單不佞遂從衆權啓請返錫住持此山以保全名（…錫を返して欲しいと請う。…） 卷之八／書啓／請慈門主化城による。

明の時代の資料であるため、時代が下り過ぎて参考にならないかもしれない。

（注の3、4、5の用例の日本語訳は稿者より）

#### 引用依拠文献

- ・ 真福寺本『将門記』 古典保存会 一九二四年八月
- ・ 『北史』（唐）李延壽撰、楊家駱主編 底本…元大徳本
- ・ 『新唐書』（宋）歐陽修・宋祁撰、楊家駱主編 底本…北宋嘉祐十四行

本

・ 『徑山志』（明）李燁然刪定、徐文龍・陳懋德訂、宋奎光輯 明天啓四年（1624）原刊本

・ 漢典 (<http://www.zdic.net>)

・ 『漢語大詞典』十二卷本 羅竹風 主編 漢語大詞典編輯委員會／漢語大詞典編纂処編纂 上海辭書出版社一九八六年十一月第一版一九八六年十一月第一印刷

・ 『日本書紀』、『続日本紀』、『日本後紀』、『続日本後紀』、『日本徳天皇実録』、『日本三代実録』朝日新聞本データベース

・ 『古漢語虚詞』楊伯峻著（中華書局1982年2月第1版 2000年8月北京第3次印刷）